

氏名・（本籍地）	堀 内 規 之（群馬県）
学 位 の 種 類	博士（仏教学）
学 位 記 の 番 号	乙第 79 号
学位授与の日付	平成 20 年 11 月 26 日
学 位 論 文 題 目	済暹教学の研究－院政期真言密教の諸問題－
論 文 審 査 委 員	主査 小 峰 彌 彦 副査 平 井 宥 慶 副査 福 田 亮 成

堀 内 規 之 氏 学位請求論文審査報告書

「済暹教学の研究－院政期真言密教の諸問題－」

論文の内容の要旨

序章

本研究の全体像を概観す。即ち、院政期の、ことに白河上皇（1053－1129）の生涯を追求し、かつその追求する意味を明かす。加えて、済暹研究は、伝記・教学・著作翻刻の三面からなされてきたが、正直なところこれまでは、『性霊集』巻八以下の「補闕鈔」再編者としてのみ知られていた感が強く、その著作の散逸（とみられる）状況によって研究の進歩は遅かった。が、近時の古寺聖教調査の著しい進展によって、済暹の著作写本が少なからず確認されるようになり、それらを、本論文提出者（以下「論者」）は可能な限り実見し検討した、と論じている（この主語は例外なく「論者」）。

第一篇 院政期真言密教の諸相について

第一章 日本仏教史と研究と顯密体制論

論者は、これまでの日本仏教史（ことに古代から中世にかけて）の研究を振り返り、そこには少なからずの偏りがみられた、として、黒田俊雄の「顯密体制論」を手掛かりとして考察し、これからは、教学の研究も当該時代の歴史性に目を配りつつ、多方面からの考察が要求される、と論じている。

第二章 弘法大師空海から南岳房済暹まで

弘法大師入定後済暹に至るまで、教学的発展はほとんどない（事相のみであった）というのが従来の通説であった。論者はこの妥当性を問い、例えば「口決」（従来は事相の部門とみなされていた）の類いも教学的成果の一類ととるべきで、通説の不当性を指摘する。この検討の過程で、「仁和寺」の存在が浮き上がってくる。つまり 11－12 世紀初・白河院政期の済暹・覚鑿・教尋・定尊・永尋・寛助ら、名だたる学匠はみな当寺に関係した、と論じている。

第三章 仁和寺御室と教学研究

宇多天皇の建立になる仁和寺は当初から親王が送り込まれ、「院の宗教的分身」となって王家護持・仏法興隆の役割を果し、偶々優れた法親王の輩出も伴って、その庇護のもと教学研究が促進された、と論じ

ている。

第四章 院政期の学匠・済暹の生涯

「済暹」の生涯と著作歴をたどる時、それは「空海教学の復興」であった、換言すると、彼は真言密教存続に「危機感」をもっていたのではないかと論者は推定する。そしてこれからの研究は、その成果を正当に評価し、同じ土壌に育った覚鑁への流れを再構築すべし、と提議する。章末に「済暹関連年譜并系図」が添付されている。

第五章 二十二卷本『表白集』と済暹

この表白文集（金沢文庫蔵）は仁和寺に係った僧侶のもの、済暹の表白文が二つ所載されている。

第六章 院政期における真言密教の学道について－仁和寺伝法会－

学道伝承の体系に伝法会がある。仁和寺での初開会は、寛助（1057－1125）が実行し、このとき寛助は咒願を、講師を済暹が護っていた。この伝法会が覚鑁の高野山伝法会の再興、根来寺論議に繋がることを思えば、講師たる済暹の存在の重みは計り知れないものがある、と論じている。

第二篇 院政期真言密教の往生思想

論者はここで、往生信仰は唯浄土教のみ、というこれまでの仏教史学界の通念を基本的に否定し、摂関期・院政期の往生信仰を多角的に捉え直すべきとする視点を提唱する。すなわち――

第一章 院政期における往生信仰の特色

『法華経』信仰による往生観の検討。この期の往生観は、のちの厭離穢土による欣求浄土ではなく、『法華経』信仰に裏付けられて、現世肯定的に来世を願うものであった、と論じている。

第二章 密厳国土論の変遷について

現世肯定的往生観という、密教行法信仰の基底にも存在し、それを「密厳国土（乃至浄土）観」という。この生成展開を後追いし、中国仏教から覚鑁までの流れを素述している。

第三章 済暹の空海入定信仰

真言密教信仰の基本である入定信仰の済暹におけるありようを論ず。済暹のもとでほぼ入定信仰の骨格が形成された、と論者は見る。

第四章 済暹の往生信仰

『讚歎觀史多天彌勒菩薩偈頌玄意』の著述比定をもって済暹の考える觀率天往生の優位性を証明す。

第五章 済暹の地藏信仰

『持念地藏菩薩殊要抄』を検討し、信仰の流れは「弥勒信仰」に及び、それは大師の入定されたことを信ずる信仰に根ざし、それを確定した済暹の役割は重い。

第六章 真言密教における弥勒信仰の展開－『高野山秘記』と頼瑜－

高野山を、大師のいま現に居ます処として、弥勒信仰を密教教理に結びつける根拠としている、と論ず。

第三篇 済暹の教学について

本論文の主課題である「済暹」の、その思想はどんなものか？ この問題について、済暹の編著になると類推される無記名書物の幾つかを、論者は検討をする。

第一章 済暹撰『百光遍照王義問答抄』について

石山寺蔵の『百光遍照王義問答抄』なる文書を検討す。

第二章 済暹撰『真言十六玄門大意』について

東寺観智院蔵の『真言十六玄門大意』なる文書を検討す。

以上の二章について、両者共に済暹撰と認むものである、と結論す。前者は百光遍照観を、経軌をもって解説して「平面に説明を補った」感ありと判釈している。次に、その後者から見るなら、済暹は「凡夫であっても秘密三摩地を修せば」即身成仏出来ると考えていた、と結論づけている。

第三章 済暹の法身観について

ここでは済暹著『四種法身義』の検討をする。ここで済暹は、顯密の差異を明瞭に示すことを意図し、大師以降の展開として「四種法身に権実を建立」した、と論者は結論づけている。

第四章 済暹の即身成仏思想について

ここでは、済暹が天台安然の思想を受け継いでいることが明らかにされ、済暹の思想として「分段身から直接仏身へ」「転換」とみていた、と論者は判釈している。

第五章 済暹の両部曼荼羅観

ここでは済暹著『両部曼荼羅對辨抄』を検討している。両部曼荼羅の二にして不二のありようを、不同相門と同相門に位置付けて整理したのは済暹であったと考察している。

これに続いて、選者問題に疑義のある著作について検討する。

第六章 『顯密差別問答』の選者について

済暹撰とされている『顯密差別問答』について、この済暹撰たるには問題があり、論者は、これは宝生房教尋の撰であろう、と推定する。

第七章 『真言付法伝』の空海撰述について

これは「略付法伝」といわれるものである。これは従来大師撰とされるも、近時疑義の呈せられている書物で、論者も再度検討考察している。結論的には、論者も確かにこれを大師の作とは認めがたく、恐らく小野の仁海編になるか、と推定している。

第四篇 済暹新出著作翻刻

ここに、近時新出した済暹関連写本の翻刻をまとめている。

第一章 『讚歎觀史多天彌勒菩薩偈頌玄意』について	p688 – 761	前出
第二章 東寺観智院蔵『真言十六玄門大意』について	p768 – 856	前出
第三章 石山寺蔵『百光遍照王義問答抄』について	P860 – 899	前出
第四章 随心院蔵『秘蔵寶鑰顯実抄』卷上について	p906 – 976	

大師御作『秘蔵寶鑰』の逐語的注釈書。現時『秘蔵寶鑰』のもっとも古い疏とされている藤原敦光の『秘蔵寶鑰抄』と、これは前後するほど古いといえよう、と論者は見る。

第五章 真福寺蔵『弘法大師御入定勘決抄』について p983 – 1017

これは、大師入定信仰に関する著作。同本は既に『弘法大師伝記全集』に、江戸後期の写本によって翻刻されているが、今般は院政期の写本を底本に、諸本を交合して翻刻した。

第六章 東寺観智院蔵『胎蔵界四重曼荼羅略問答』について p1027 – 1042

これも従来、『大正蔵』図像部に影印ありて『続真言宗全書』にも活字化されているが、それは高野山大学所蔵本によるもの、更にこの所蔵本というのは智山書庫所蔵本からの転写本で、この智山書庫所蔵本なるものは、保元元年（1156）の本が元になっていると伝えられる。これに対し、今般論者は、嘉承二年（1107）本により校合、この本は済暹在世中のものということになり、現在のところ、そういう在世中の古本は、これ唯一であると論じている。

第五篇 結 論

論者はいう。従来、院政期は古代と中世の転換期として、仏教教学的にも「過渡期」的扱いをされてきたが、これは大いに間違いである、と。かくして、その院政期の、真言教学を代表するものとして、済暹（や 覚鑑）の存在が持つ歴史的意義を、よく見極めねばならないとする。その追究には「様々な分野の研究 成果を取り入れる」ことが肝要で、たとえば黒田俊雄の「顯密体制論」である。が、これもまた万能の理論 ではないから、これにも批判的研鑽が要請されなければならないと論ず。

本目である済暹の教学振興事業は、御室の法親王の後押しがあつてのことで、その証左が仁和寺教団に 残る“表白、法会”類の文書である、と指摘する。

もう一つの追究の方途として、平安末からの時代を特徴づける信仰に往生思想がある。これも従来、浄 土往生にのみ言及される傾向が強かったが、済暹の「空海の入定信仰に支えられた弥勒信仰」がこの時期 の往生信仰を語るには重要で、これは頼諭にまでつながるものである、と論ず。

そこで、済暹を、そしてその教学を語るときの最大の要諦は、彼が大師宣揚の一念に燃えていた、とい うところにある、と論者は断ずる。その第一は、これは従来から謂われてもいる『性霊集』の散逸してい た巻八・九・十を嘆き、新たに『補闕鈔』三巻を編纂したことに表れている。

次に、海恵なる学僧に『密宗要決鈔』なる著作がある。これは後々に多々つくられた「決擇書の先駆的 著作」になるものであるが、ここに最も多量に引用されている書物が、済暹の撰述になるもので、ここに 済暹教学の最重要であることが、如実にあらわれているといえる、と論ず。

その済暹の著述になるものは、諸目録に若干異同があるものの、ほぼ六―七十余部になる。そのなかには、大師の御作になる著述に対する注釈書として、真言教学史上最初のものとなった著述が多数あるとい うこと、しかしその多くが散逸していることも事実であるが、現時には各所の古寺院の経蔵が調査されつ つあり、いま着実に新発見になる書物の増加をみている。そしてそこから知られる済暹教学の「基本的な 立場」がみえてくる、というのである。

それは、大師教学に対する台密乃至五大院安然からの批判に、いかに応え、しかも「その批判がいかに 無意味であるか」を証明するものであった、そして大師の教学思想を「擁護し、さらに発展」を期したもの が済暹の教学であった、と論ず。すなわち「空海への思慕」「空海をひたすら生きようとした」のが済 暹であった、と論者は結論するのである。

結論の最後に論者は、真言教学にかかる写本研究の現状を概観する。

現在、日本各処における古寺院の経蔵が開けられつつあり、古写本の発掘は夥しいものがあるが、それ を手掛けている研究者は、一般社会歴史学の分野のものが圧倒的に多く、それは必然的に「世俗社会」の 事象に係る研究に傾くものであった。しかしその発掘にかかる文書の多くは、当然に「寺院社会」に関す る文献、所謂「聖教」そのものであって、ここに寺院関係研究者が参画しないのは、いかにも不自然とい うほかない。寺院関係者側も大いに関心を高めて、この分野の研究に精出すことが、今要請されている最 も重要な点であると考ええるものである、と論者は仏教学界の現状に警笛を鳴らしている。

なお、こういう写本の翻刻が、当該学会誌に掲載しにくい、ような現状があつて、その理由を含めて、 論者は疑問を呈している。

また「新義教学の大成者」とされる「中院頼諭」著作全集すらないことを嘆いている。近代における 研究方途では、何につけ（どの分野においても）、その原点に直接密着して研究することを良しとしたこ とは、間違う方ない事実であった。この傾向が真実の探究・発見に大なる貢献を果たしたことも、語る までもない近代の功績であつたろうことも納得できよう。ところがその流れの中で、若干ならず、置き忘

れられてしまった課題が少なくなかったのではないか、という心象が、論者には拭い難いものがあるようである。

論者はこれからも「多くの失われた済暹の撰述書を求め」、聖教研究の旅に出るという。大師以降の真言精神史探究の旅に出る、ということであろう。真に良しとすべし。

論者の研究のさらなる発展を期待して、以上、内容の紹介を終るものである。

審査結果の要旨

(1) 研究観点としての「院政期」論述について

論者は、「済暹」を論ずるにあたって、その所属する時代、すなわち「院政期」について、その重要性について論述している。研究する以上、そこの研究する意義がなければならない。それは済暹研究の意義でもあって、論者にとって、ここから後世に伝承される“真言教学”が始まった、と考えているごとくである。それなればこの現象は、済暹個人の資質によるものであるか、彼をしてそうさせる歴史的條件が整ったことによるものか、こういう観点に立って、論者は院政期に関する研究の現状展望と、済暹研究の現状について概観して、済暹を歴史性のなかに位置づけるように論述する、と主張する姿勢に過不足ないことは、まことにこのましい。

平安の中・後期は、日本社会がそれなりに国民的に成熟していった時代といっているのではなかろうか、その結果、社会的安定期ともいえる平時の安定が実現し、寺院内における「研究」的雰囲気を持続を許してくれたごとくであるとして、論者は「白河上皇」に注目し、その周辺から済暹に至っている。実は院政期に対する一般歴史学の分野の関心も、まだ発展途上で、論者の研究が開拓的性格を醸しつつなされている現況が、行間ににじみ出ているあたり、本研究の大いに推奨さるべき点である。

以上の、研究観点について、論者の主張は真に明快である。これは、この時代を必ずしも主題としていない研究者等にも説得力を持つと考えられ、気鋭の片鱗をみせているといえよう。

(2) 研究の問題意識について

論者は、この時代（仮に古代—中世）に関する従来の仏教研究の傾向に警笛を鳴らしている。それは、あまりにも鎌倉仏教の見方に偏しているというのである。しかもそれは、近代における既成仏教教団勢力の大小による反映の如くのように、いささかならず非学問的状況といわねばならない、と嘆き、その是正を強く主張している。

そこで論者が引くのが、戦後うち出された黒田俊雄学説（顯密体制論）である。これは、それまでの鎌倉期の仏教勢力図によるとして“鎌倉新仏教”なるひとつの概念でそれ以前の仏教状況まで包むごとき研究視野の一方性を否定し、論者が提起するところの、むしろ平安期以来の社会現実に沿う形で仏教教団の流れも捉え、そこから鎌倉期仏教も見る、という視点に通ずるものである。

ところで論者は、この学説に深い共感を抱きつつも、これが戦前の平泉澄学説の延長上にあるという指摘（今谷明）を引用するのは公平であり、この学説に内在する問題点を挙げているのも好ましい。自己の学説に対する有為性にのみ固執することなく、多方面に目を向けつつ考察する姿勢は、あるべき研究者の客観性を保障するもので、論者の研鑽の公平性を証明するものといえることで、評価するにやぶさかではない点である。

鎌倉仏教一辺倒のような傾向が、近時若干ずつ改善されつつあるような状況はあるものの、具体的な研究方途までの進展に向けて開拓意識を高めようというとき、論者は済暹を研究することによって、それに

加えて、大師の存在をも再開拓し得る、という視点を明確にしているように見受けられ（論者のこの主張も明瞭である）、論者の今後の研究に期待するところ、更なるものがあることを表明しておきたい。おそらく論者はこの要請に応えてくれるものと確信できる素地が、各所に見えることを付け加えておきたい。

（3）済暹の教学について

①個別的問題点

本論は「済暹教学の研究」と題する如く、全編が済暹教学に係わること言うまでもないが、殊に第三篇が、専一に「済暹の教学」を論ずる段となっている。

（一）論者は、済暹の歴史的な基本姿勢として、大師の今居ますが如くに大師讃仰を基調としていた、と捉えている。そのうえで言えば、済暹の教学は、大師のそれでもある、ということになるであろう。済暹は、あたうる限り大師の教えを祖述しようとしていた、と論者も、そこここで述べている。その一つの例を、即身成仏思想についてみてみよう。

論者によれば、済暹は真言密教の即身成仏論を「速疾一生成仏と即身成仏」の二面に考えていた、とみる。そして当然、その後者が真の真言密教即身成仏である、また龍女成仏等顕教の速疾成仏は即身成仏には「該当しない」と判断している。

これを両部曼荼羅に配すれば、胎藏界が前者、後者が金剛界、とする。これらの構造論は、実は安然の『菩提心義抄』にあらわれるところで、済暹はこれを「重要な論拠」として継承していた、と論者は論じている。大師に立ち返れば、「二教一論八箇証文」における『菩提心論』の所説乃至『秘蔵記』の内容に準ずるとみる。なお、済暹自身の考えでは『大宝楼閣經』に即身成仏義が示されている、と論者がいう（『即身成仏証拠問答抄』）のは、済暹独自の論拠を指摘したということであろう。こういう指摘は論者の成果であって、こういう論者独自の指摘は、ここばかりでなく随所に散見される。可とすべきである。

（二）教学研究の歴史的位相を判断する難しさは、祖師の思想に対して、当該の弟子がどういう構えを有しているか、そしてそれをどのように理論実践化しているか、を、いま論ずる者が見極めることにあろう。有体に言えば、祖師祖述と更なる思想展開の、両者の兼ね合いを論者が判断するところにある。具体的に、済暹の祖述性と独自性の兼ね合いを如何にみるかである。論ずる者が、そこにしかと視点を見定めておかなければ、当該の学匠を歴史的に位置付けることが不明瞭になる。

さてそこで、「法身観」について、論者は一節を設けて大師の四種法身を論じている。

済暹は大師の四種法身観を整理してほぼ三点に纏めている、と論者はいう。

- ① 大日如来の徳用としての四種法身
- ② 自受法楽によって真言両部を説く法身の自眷属としての四種法身
- ③ 四種法身に横・縦（自利・利他・法爾・随縁）あり

その上で済暹は、「北界宮（乃至本有金剛界）密嚴土」に住する四種仏身のみ四種法身と定義し、天台の安然が一切の経論所説の仏身全てを法身とみる見解と大きく異なる、と論者はいう。

更に済暹は「四種法身に権実があるか」を問題にしている、と論者は指摘する。ここが、「空海と済暹の異なる点」であるというのだ。実たる四種法身を衆生は見聞すること出来るのか、という凡夫にとってはいかにももったもな疑問であろう。これを問う済暹のあり方は、ここに時代の変転が如実に表れているともみえそうである。ところで端的に言えば、済暹は『瑜祇經』を引用しつつ、密嚴土の実たる四種法身を衆生は見聞できない、出来るのは「影像の化身である他受用身・変化身・等流身」のみ、これは実ではなく唯識の謂う第八識の所変のもの、と済暹は主張している、と論者はいう。幻術師がいて幻術が行われ

る、衆目はその幻術現象をみるのみ、それは真ではないが幻術師と不離のもの、衆生がみる変化としての応化身は実身から出たものではなく、「加持自在神力」によって衆生の心内にみせしめられたもの、これを通じて衆生は「得解の境界」を成就することになる、というのである。

済暹は、真実四種法身は法界宮密嚴土に住する四種仏身のみ、他はその影像仮身と規定し、顯密の法身觀の相違を一層明確化した、と論者は位置づける。明確化するための概念規定、ともいえる、と。“権実”の建立も、大師の「法然と隨縁」「自利と利他」という対立概念の継承といえる、これはとりもなおさず顯密の違いを明確化するため、という。このところは確かに、大師の思索を半歩出でている感がある。ここに着目した論者の慧眼は鋭いといえよう。

その意味ではこのところ、大師御自身の即身成仏思想に関する検討がもう少し為された上での理論展開が望まれたかもしれない。大師とその思想に面と向かった済暹という学僧の、教学的価値の理解に及ぶ領域の問題だからである。しかしこれはバランスの問題で、論者の研鑽の範囲内に収まるものと心得る。

(三) この点で、「兩部曼荼羅觀」の問題は、少々悩ましい問題かと思考する。論者によれば、大師がこれを述べるのは「『秘藏記』において」であったという。しかるにこの本は近代になって大師の撰述たるに疑念が持たれ、論者もこの本の成立を「十世紀半ば」とする。そこで論者の論述態度としてはどうか。いま済暹が曼荼羅觀を考察するに際し、本書は充分に参照されたと「考えられる」からと、まず『秘藏記』の記述するところを纏めている。この一点は、論者の妥当する判断と心得る。近代の成果を古代に適用するに際し、その時代性までも却下する如き研究態度は、「近代」の横暴となる可能性大だからである。「近代」の思弁がどこまで通用しえるか、まったく不毛だからである。この指摘を為す論者の研究姿勢は、真に明瞭で、博士論文としても好ましい。

同時に亦、大師確實の記述に配慮する姿勢も要請されるのが近代であろう。論者はその点で、『付法伝』乃至『十住心論』に言及しているのは可とされるが、若干言葉少ないように見える。『秘藏記』記述についての分析に比して、である。亦、現代に喧しく議論される“兩部”と“兩界”という表現について、済暹がまったく言及しないのも、時代性のもつ特徴を如実に示しているといえようと指摘している。祖師への尊崇の念と当該の御著作に対する伝承精神の発露の意思を示しているということである。要するに、批判精神の旺盛な現代に生きる我々としては、大師の曼荼羅觀と『秘藏記』のそれと、済暹の整理する曼荼羅觀と、これらのそれぞれの距離をいかに適確に判断するか、ここに現代研究者の技量が試されている、とみられるのである。これは云うは易し、実行はいささかならず困難さの伴う課題であるかも知れない。然しこの視点は、現代に避けて通れない研究方途と心得るもので、論者の一層の研鑽を期待するところである。おそらく論者のこれまでの技量を推し量れば、それは可能と心得るから、敢えて言及するものである。

(四) 済暹の教学を論ずる篇で、大師の御作とされている『略付法伝』の真偽問題について論じられる。これが“略伝”として位置付けられたのは、頼瑜(1226－1304)の『真俗雜記問答鈔』からであろう、と論者はいう。その略伝の「編纂者」と推論されているのが済暹、となっているが、論者はこの推論を否定し、済暹には「成立年代の下限」を設定しているのみであるとみている。因みに論者は、編纂人に仁海(951－1046)を推定する。その推論の筆先は過不足ない、説得力を保っているといえよう。敢えて問題点というならば、これらの登場人物の配置を、済暹の教学的立場指定の観点から叙述し直したらどうなるか、であろうか。論者の更なる考察を待ちたい。

(五) 『顯密差別問答』の選者比定問題の論述も、同様の課題が浮かんでくるように思考される。ここで登場する学匠は、済暹・教尋・覺鑒である。論者はこの『顯密差別問答』書の選者としては教尋説をとる

が、「済暹の教学」という篇に存するこれらの課題につき、論者がこの書誌学的記述のみに留まることなく、これを機軸にしつつ思想史的観点にまで軸足をかけた躍動的筆法を期待したい。この観点が教学史変遷の歩みを跡付けるに是非必要と思われるので、論者の研鑽を期待するものである。

②総体的問題点

こういう全体的論文構成の上で通観的にいえることは、現在の時点では資料的な制約の多い「済暹」という研究課題に対し、あたうる限りの挑戦を試み、多方面からよく解明の努力を惜しんでいないことに、賛意を表したい。その追究の仕方についても、学問的手数を着実に追って、学術水準を崩していないことを評価しなければならない。これはまごうかたなく、学術的論文であると認められる。

それなるが故にというべきか、若干の希望を述べさせていただく。

あまりの多面的記述に、これは必然的こうならざるを得ないと思うが、済暹教学の全体像が一読の者をして明瞭には把握し難いということが考慮さるべき点といえようか。その著作のすべてが開示されていない現状は考慮されるも、済暹教学の特色を一言でいえば、どうなるか、という問いに、どう答えるか。そのような読者もいることを前提にして論述する方途を考えるべきであつたろう。しかもその実行は、この論者には可能とみる。

論者は台密の重要性を強調している。しかしその具体的な引用・指摘が少ない、と言わざるを得ない。このことは“事相”に関する言及においても同様で、事相にかかわる文書は実践修行の内容に対する教学的理解の書、といいながら、そのことでの済暹についての言及は乏しい、といわねばならない。事相に関心をむけるなら、他方で“現世利益”という概念も問題にされなければならないであろう。このあたりを済暹がどう考えていたか知りたかった、というのが正直な感想である。

済暹の時代性を論ずるに際し、性信の人物像も欲しかった。済暹との位置関係において、もう少しの考察が望まれるように思考される。

極めて大部の論放を一貫した文章で記述する困難さは容易に推量できるが、それでもその趣旨のいささか不明な文章が若干散見された。論旨の主張を簡明に表現する、この要求は、この論文を読むものが同分野の者ばかりではないであろうということを物語るものでもある。ここに本論文の卓拔さが良くあらわれている。この論文は、いつにこの期の教学的興味にのみ資するばかりでなく、恐らくこの時代の精神史に関心を寄せる研究者すべてを裨益する成果を蔵する論文となろう、と思われるのである。これはこの論文のもつ広範な内実を物語るものでもあることを言い添えなければならない。

(4) 翻刻研究について

前述の如く、論者は後半の三割強の頁を割いて、済暹著作の新出版について、翻刻を試みている。“翻刻”は写本の原型をあるがままに再現する。底本に訓点・一二点等があれば、それを示す。そして、無ければ付されない。言うまでもなく、古代文面には、いまにいう句読点は無いから、現代に翻刻本をみる者は、その解読にあたっては、著しい技量が要求されることになる。それを論者は成し遂げている。これを諒としなければならない。そこで提言一つ――

論者はこのたび、当研究を推進するにあたって読破したものと心得るが、この論文が近隣の研究にも多大な利益を齎すに違いないことを思えば、書き下しの文章が欲しいと思うのは、贅沢なわがままであろうか。前記“著しい技量”は分野を異にするものは勿論、同分野においてもいささかの困難さを感じずるものである。もっとも論者は、その作業も今後の研究進展経過のなかに読み込んでいるかもしれないから、それをいまは待っていようと思う。

尚この大著録の中では、ここは「本論」の一部、というより、“附篇”というような位置づけではどうであろう。この本を公開する機会には、そのあたりの構成の、全体的バランスを十分に考慮して編集することを望みたい。

(5)「結論」の問題

本論文を通覧するに、大部でありつつ（あるが故に、と謂うべきか）、いまだ研究途上にあるという感も否めない。それだけ扱うべき課題が広いということで、博士論文として好ましいのであるが、しかして「結論」をことさら挙げる必要をあまり感じない。形式上附すなら、今後の展望のため本論を取りまとめた研究推進上の自己検証作業を点検したらどうであろう。これまでの教学研究に他分野の成果も視野に入れて多方面からの考察を目指した、その実現度の検証である。これは本研究成果の優劣に及ぶ重要な作業要素と心得る。

論者の意識には、院政期研究はこれまで不当に等閑視されていた、という想いが強くある。一般史はいうに及ばず、教学史においてでもある。古来の権威ある一人の研究者に導かれた学的景観がその是非を問われぬままに何時までも通用している、その閉塞感を一挙に破るには、一般歴史学との共鳴的探索方法をとってこそ、近代研究に値する教学成果が期待できると論者は論じた。これは博士論文としての独自性にも及ぶ研究姿勢として、高く評価されなければならない。しかして、その実現度が今の成果の是非を決定するというなら、その検証は是非必要であろう。

要するに、この度の有るべき“結論”は、この論文の終着点という以上に、次期研究世界に出発するための展望、という意味合いを強くしたものが良しと心得るが、したがっていまは“結語”ぐらいの軽身にとどめておいたらどうであろう。

(6) 総括

本論文は大作である。それは、紙幅の分量ばかりでなく、自らに課した問題の重さにおいて、かつその課題を論究していく手法の妥当・堅実さにおいて、堂々とした論陣を張っているということによって言えることであり、これらはまた学術的論文の要件をも、よく満足せしめていると判断する。

“済暹”という学匠は、正直言って、これまで注目されていたとはいえない人物である。そういう学匠の歴史と教学に、果敢に挑戦し研究して、その重要性を明らかにしていることは、大いに評価すべき点である。しかもその分野において、済暹を「院政期」という時代背景の中で捉え、立体的な人物像を描こうとする努力を前面に押し出していることは、これからの教学研究の指針の一つにもなるであろう。開かれた教学研究とでも言おうか、それには一般歴史学、乃至仏教他派の教学動向にも目配りを失わず、多面的な研究視点の確立が望まれること、急務である。論者はいまその先頭に立っている自覚（本人が良く自覚していると認められる）を忘れることなく、さらに研鑽することを期待する。

その研究を遂行する道程で、新たに発見された資料の翻刻を成し遂げ、そればかりでなく、その内容を巧みに利用し、論文をまとめているのも、学的に好ましい。そのなかから、これまで疑問であったいくつかの問題点も、今の時点での成果であるが、あきらかになったことも、評価の対象である。

ここで一言、真言新義教学の展開という立場から付け加えるならば、この済暹の研究が、真言新義教学の確立に邁進した覚鑠上人の教学理解にも大いに助力するであろうことを予測していることが、まことに興味深く、それを指摘する論者の視点を諒としたい。覚鑠自身の理解も、従来研究成果範囲でいうとき、まだまだ多くの問題をかかえている如くであるとき、これは一つの突破口になるのかもしれない。

本研究は、いつに済暹にとどまらず、この時代・この分野の、今後の研究のさらなる発展が期待できそ

うで、こういう方面に風穴を開けたるがごとき本研究の、これもひとつの積極的に評価すべき点と、あえて指摘しておきたい。

かくして、上記「審査結果」文中に、更なる論考についての若干の希望点は記したところもあるが、そのことがこの論文の学術的要諦を損なうものではないことを特記し、結論的に言って、本論文は博士学位請求論文として、十分に合格に値する論文であると思えるものである。

以上、本論文を博士論文として認めることを以って、「審査結果」文を終るものとする。